

淡水化され魚種その他の生物は、大きく変化していくものと考えられています。

五、漁業の変化

明治初期に始められた帆曳網は、のどかな霞ヶ浦を背景に詩情豊かな風景で見る者の目を楽ませ、漁業の中心となつて来ました。帆曳網が能動的な漁法であるのに対し、受身の漁法の代表的なものが張網で霞ヶ浦で最も数の多い漁具で農業との兼業によつて成り立っています。霞ヶ浦の生産量は全体で一萬五千トンぐらいで、これを分け合いながら漁業が営まれています。わが国の経済がここ十五年ぐらいの間に急激な成長を示しましたが、これに対応するためには、(一)、漁獲の強さを増加させるか、(二)、系外から、エネルギーを投下してやるか——ちやうど石油や鉄鋼を原料として輸入して成長をうながしたように。(一)は、帆曳から機械曳への転換となつて、(二)は網生簀の導入となつて現われて来ます。機械化は労働時間を短縮したという点では、画期的なことでしたが、それに見合つた新たな生産の場が準備されていなかつたために乱獲におちいり、生態系が大きく変化し、ワカサギ優占型からエビ、ヘゼ優占型の状態が出現して来ました。環境を守ろうとする場合に、一つ大切なことは、人間にとつて必要な環境は何であつて、そのような状態を維持

するためにはどのような管理を必要とするのかということを知る必要があるということです。それは単に、技術的な問題だけではなくて、もつと広く社会の問題を含めて考える必要があるような気がします。たとえば、一例として先にあげた労働時間の短縮にもなつて、それに見合う場を準備してワカサギ型の生態系を残すなどです。昭和四三年頃からは、プランクトンの種類が変化したり量が著しくなつたりして、四六年には皆さんよく御存知のようにアオコの大量発生やコイのへい死がおこつて来ました。四八年はたしかに渇水でしたが、霞ヶ浦への負荷は年々増加しているものと考えられますから、このままでは、アオコの大量発生は、さけられないこととなります。

六、おわりに

現在この問題の解決方法としては、三次処理等の技術的な方法だけがとりあげられているようです。このことは、たしかに必要なことでもあろうと思います。しかし、もつと長い目で見た場合には、それだけでは十分で一つの地域の調和を考えた設計が必要となつて来るはずで、それが忘れられたならば、いつの日か霞ヶ浦は、いや地球さえも最後の日がやつて来ることになり